

## 要 旨

### 理想化される後宮殿舎

——「かかやく藤壺」を起点に——

天皇の後妃やその皇子女らが住まう後宮殿舎（七殿五舎）は、数多の平安王朝物語に舞台として登場しながらも、その史料が少ないために殿舎自体に対する検討があまりされてこなかった。しかし文学作品における後宮空間は、特に準拠を探る場合には欠かせない要素であると論者は考えており、またその史的な変遷をたどることは読みそのものを深めるために重要な手段であると認識している。このことを念頭に、本稿では『栄花物語』の巻名にもなっている「かかやく藤壺」という語に着目し、藤壺（飛香舎）という場所が実際のどのような場であったのか、そしてその空間が虚構の作品である『源氏物語』や『栄花物語』にどのような影響を与えたかについて考察した。

第一章では、歴史資料を紐解きながら藤壺の名称や構造、

使用例などからその格式の低さを明らかにしたうえで、藤壺に代表される五舎が本来は后妃の居住空間ではなく、何らかの儀礼や宴を執り行う場合に七殿に住まう后妃らが副次的に使える場所であったことを明らかにした。これまでは七殿、特に弘徽殿に対する相対的な格式の低さのみ着目されてきた藤壺だが、正式名称である飛香舎の「舎」の字が帯びる格下の意識は絶対的なものであり、後世において弘徽殿と並び立つ妻后の居所という認識を持たれることとの間には明らかに乖離が見受けられる。

第二章では、藤壺が文学作品、特に『源氏物語』においてどのように扱われ、藤壺を象徴する人物である藤壺宮と空間としての藤壺がどのように影響しあっているかを考察した。『源氏物語』は藤壺宮を礼賛することよりも、敵対勢力であ

黒川 真未

る弘徽殿女御に対して悪后を想起させるような描き方をしている。このことは弘徽殿女御を一方的に貶めることで藤壺宮の人物像を醜化し、読者にとって理想的な人物を思い描かせ、効果を持つていると考えた。また、殿舎の観点から物語を読み解くと、藤壺という場がもつ格の低さを隠す意識がその呼称（正式名称を用いない）からうかがえ、作画的に藤壺を弘徽殿と同等、そして弘徽殿を圧倒していく場として書いていくことがわかった。

第三章では、「かかやく藤壺」に目を戻し、藤原彰子入内時に内裏は焼亡していた事実を史料をもって確認したうえで、新造内裏において彼女が格の低い藤壺に入った理由を探った。天皇よりも東宮が早くに後宮を形成していたという特異な状況にあった一条朝で、遅くに入内した彰子が居住できる殿舎はすでに藤壺しかなく、先任者がいるかどうか最優先されていた後宮では、新造内裏に中宮として入ることとなった彰子であっても格の高い弘徽殿などに居住する権利はなかった。こうした事情もあって藤壺は彰子の居所となったのだが、その格の低さを隠し、また中宮の居所にふさわしい場所として礼賛するために『源氏物語』と『栄花物語』は各々の手法をもって藤壺を理想化した。このことは藤壺の価値をきわめて高いものとし、物語内だけでなく現実でも藤壺が妻

后のための居所であったと錯覚させる要因となっていくのである。